
くるくるサマー

二葉一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くるくるサマー

【Nコード】

N8984G

【作者名】

二葉一葉

【あらすじ】

夏のテーマで、一話完結（たまに前後編）です。つれづれに思い立ったままに、ラブがあるのかどうか……。9月あたりまで、連載します。

prologue 『夏』

夏が嫌いだ。

理性より本能が少し強くなる。

1枚1枚服を脱ぐように、理性が剥がれていく。

ジメリとした暑さに汗を拭う。

張りつく喉に唾を飲む。

生温い水に八つ当たり、辺りに撒き散らす。

虹。

7色の虹を美しいと思うのか。
醜いと、思うのか。

笑
っ
た。
。

unit - 1 『真夏の夜のユメ』

「大っ嫌いっ！別れるっ！」

真夏の夜だった。

夕飯はそうめん、で、薬味がなくて、わさびで食べた。
ふたりで食べたから、美味しかった。

テレビはお笑い番組。

最近よく引っぱりだこの芸人の、笑えないネタを、笑って見てた。
クーラーのない部屋は、扇風機が頑張って首を振っていた。

いくらなんでもそれは、急過ぎやしないか？

ぼろやアパートの部屋のドアは、開けっ放しのまま。

鍵を掛けるのも、ちょっとした技が必要なドアなのだ。
それを、開けっ放しのまま・・・

蝉は夜中でも鳴くんだなあ。

チリン、と風鈴が鳴った。

いつの間に風鈴なんてあったんだろう。

最近、とても部屋が綺麗だし、いい匂いをするようになった。

メンソールの匂いをするって言ったら、アロマの香りだって言っ
たっけ。

ゴキブリも、まだ見てない。

ごめんって、言えばすむものなのだろうか。

何に、ごめん？

せめて理由が知りたかった。

怒ることも泣くことも、できやしない。
きっと。

わからないから、出ていったんだろう。

・・・もう、わからないままなのかな。

チリン。

風鈴が鳴った、と思った。

開けっ放しのドア。

そういえば、お守りって言って、ずっと鈴を持っていたっけ。
何の、お守りなんだろう？

「・・・おかえり。」

「ただいま。」

テレビからずっと、笑い声だけが流れてた。
真夏の夜だった。

unit - 2 『とけちやいそつ』

プール。それとも海？

山。とくれば、川。

アイスクリーム。よりはソフトクリーム。

じゃなくて、かき氷。

動物園。なら、水族館。

向日葵。と、朝顔。

夕立。に、台風。

お祭り。で、花火。

幸せ。幸せ。

とっても、幸せ。

とっても、とっても、とっっっ・・・ても。

幸せ。

とけちゃいそう。

蝉。

蝉の大合唱。

・・・ああ。

寝てた。

いつのまに寝ちゃったんだろ・・・？

ん・・・。

夢。

変な夢、見てた。

・・・ような気がする。

忘れちゃった。

お腹、減った。

「おかあさああん、ごはん。」

ごはんは、カツ丼。

バカ兄の『メシいらねえ』メールのおかげで、カツが2枚のつかった。

美味しいごはんはいくらでも食べられる！

食後のアイスクリームは欠かさない。

7本入りのチョコレートアイスバーの最後の1本。

やっぱりバカ兄がいないおかげでゆっくり食べられる。

テレビは歌番組。

ナツ歌。

思わず口ずさむ。

あ、明日、みんなとカラオケ行こー。

あ。

「おかあさん、アイス、買っというー。」

「自分で買っておいで、ギター娘っ！」

はいはい。

夏休み。

ギター、ギター、過ぎていく。

プールも、山も、かき氷も、水族館も、向日葵や朝顔も。

夕立と台風と、お祭り、そして花火。

ギター、ギター、過ぎていく。

幸せ、幸せ。

あ。

宿題。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

unit - 3 『始まりの夏』

寒くてマジびびった。

だつてさ、外は朝っぱらから30度とかいってたぜ？

なのに何でここ、こんなにさみいの？

つか、何度？

マジ、震えるんですけど。

リモコン、リモコン・・・

置き去りにされてる感の枕の上のリモコンは、『室温15℃』。

・・・環境保護団体につきだしてやろうか。

「オラ、起きろや。」

頭まで被ってるぶ厚い布団をはぎ取った。

タンクトップに短パンで丸くなってる姿。

エコだ、環境問題だ、マイナス6%だ、つつうものは、この男には無関係らしい。

もぞつと動く。

開きもしない目でこつちを向く。

「さみい・・・」

永眠してろや。

「・・・なに？」

「なに、じゃねー。約束を忘れたとは言わせねーよ？」

「・・・なんだっけ・・・」

マジでコイツ、凍死しねえかな。

真夏に凍死。

お前なら許される死因だな。

さつきより丸くなった背中を蹴って、ベッドにのぼる。
間接的に感じる体温が気持ち悪い。

小さく呻る背中を跨いで、窓を開けた。
熱い空気が冷たい空気を押しつける。

やっぱり、あちいよなあ・・・

窓の下、おばちゃんがホースで庭に水を撒く。

去年は庭でスイカ割りをした。

昼間に花火をやったし、夜には布団を敷いて星を見た。
ホースを揺らして、おばちゃんがこつちを見上げる。

「奈那子ちゃん、ツカサは起きたー？」

今年の夏も、始まったばかりだ。

「・・・起きた。」

まだ、とおばちゃんに答える前に、起き上がったたヤツは、でっかい欠伸をひとつした。

Unit - 4 『Grotto de Ipanema』

隣の家の幼なじみは、日の出と共にやって来る。

「グッモーニンッ！いい天気だねー！」

AM 4:20。

薄暗い外に、いい天気なのかどうか、わかりません。

カーステレオから流れるのはボサノヴァ。

オレが好きなのはロック。

夏はRock！

なんて、オレの熱いロック魂はノー天気な幼なじみに早々と却下された。

その幼なじみは助手席で流れるラテンのリズムに口ずさむ。

短い髪が風にあおられて、広いデコが丸見えだ。

小麦色の肌、細い手足、青いビキニにぺったんこな胸。

悲しいかな、今年の夏も、コイツの成長は望めない。

「アタシも免許、取ろっかなー？」

おもちゃのサングラスを掛けてふざけたヤツが何ぬかす。
オレの運転じゃ不満か。

「クルマの運転って、楽しそーだよねー？」

「・・・オレは乗らねえからな。」

コイツよりいいオンナはたくさん知ってる。
そんなオンナは助手席であぐらなんてかかねえし、チュッパチャツ
プスを舐めたりしない。

朝焼けの光に高層ビル群が飲み込まれていく。
潮の香りを追って、マスタングを走らせる。

そういえば。

ボサノヴァを口ずさむオンナは、コイツしか知らない。

コイツより手強いオンナなんて、いないんじゃないか？

・・・まったくさ。

なんの警戒心もなくビキニ着て、無邪気に笑ってくるオンナを、ど
う攻めろってんだ。

19年間、築きあげてきた幼なじみってやつは、いまやビッグウェ
ーブ以上だ。

「うん、今日もいい波だっ！」

そんなセリフは、せめて海が見えてから言うってほしいよな。

unit - 5 『オ・バ・ケ』

夏はね、オバケが出るんだよ。

きょー、ミラちゃんが、リンにおしえてくれた。

オ・バ・ケ。

オバケが出るって。

どこに？ っ てきいたら、そとに出るんだって。

なんじ？ っ てきいたら、夜、だって。

リンやミラちゃんやみんながねたあとに、出るんだって。

・・・ほんとカナ？

ミラちゃん、こないだウソついたんだもん。

プール、およげないってゆったのに、およいでたんだもん。

センセイにほめられて、シヨウくんもスゴイってゆって。

リンが、どーしておよげるの？ っ てきいたら、れんしゅーしたんだ
よって。

・・・ズルイよ、ミラちゃんってば、リンにナイシヨで。

だから、ほんとかどうか、見ないとね。

ウソだったら、あした、ミラちゃんにゆーんだ。

センセイにも、シヨウくんにも、ほかのおともたち、みーんなに。

ミラちゃんはウソつきだよって、ゆっちゃんだから。

パパとママは、下のへやでテレビ見てる。
だからダイジョーブ。

パパとママのへやのベランダから、そつと見るだけ。
もしね。

もし、ほんとうだったら、ちょっとこわい。
・・・シーツかぶって、かくれていこう。
そつと見るだけだもん、見つからないよ。

だれもいないパパとママのへやは、くらい。
ベランダのそとが、あかるい。

夜なのに。

あんなにあかるかったら、オバケ、いないんじゃない？
ドキドキして、ベランダのカーテンを、すこし、あけた。

そとのデンキがついて、だあれも、あるいてない。
なあんだ。

オバケ、いないじゃない。
やっぱり、ミラちゃんはウソつき。

ベランダのまどをあけて、そとに出てみた。
サンダルないから、はだしでいいや。
ママにみつかったら、おこられちゃうけど。
いないから、ダイジョーブ。

あしのウラが、ひんやりした。
ちよつとねるうい、風。

まんまるのお月様。

・・・あれ？

そら、へん。

白くて、もやもやしてる・・・。

・・・

・・・

「あっ！」

いま、チカッて、なにか光ったっ！

・・・オバケだっ！！

「リン？何してるの？」

「ママっ！！」

へやがパツとあかるくなって、おどろいてるママがいた。

おこられちゃうかもしれないけど、リンはママよりずっとずっとおどろいてたから、ママにかけよって抱きついた。

「どうしたの、リン？」

「どーした？オバケでも見ちゃったか、リン。」

へやにきたパパが、ゆった。

「夏はね、オバケが出るんだよ。ミラとリンとの、ふたりだけのナイショだよ。」

unit - 6 『fall in LOVE ?』

カウンターは70を越えた。

ガーガーって、同じ動作を繰り返す機械の前は、アツい。

ガンガンとクーラーが効いてるところで、口元の乾燥が気になるのはクーラーのせいかな、この機械のせいかな。

74、75、76・・・

最近は何でも速さを求めるから、1秒かからずにカウントが増していく。

100まであと11、10、9、8・・・。

ただのコピー係。たまにお茶くみとパシリのような雑用が多々。

私の仕事なんて、私がいなくなったら困らない程度。

このご時世、経費と人件費削減なら、真っ先に私は必要とされない。

3日後の夏休みが待ち遠しい。

予定があるってわけでもないけどさー！

・・・2、1、100。

仕事をやりとげたコピー機が誇らしげに見えた。

会社も私よりこのコの方が必要よね。

出来たての熱い用紙は、もう少し人に対して親切に冷めて欲しいけど。

さて。

これを2枚ずつホチキスで留めて、あと30分後に始まる会議の前に机に並べなきゃ。

急げ急げっ！

「お。ごくろうさま。」

ジャスト10分前。

ミネラルウォーターのペットボトルと、資料が50部、準備が整った会議室を見回した。

そこにタイミングよく現れたデキそうな上司。

名前、なんだだっけ？よく聞くけど、覚えてないし。

どこの部だったかなー。

ま、いいか。

「部長。お疲れ様です。」

どう？見て下さい？

・・・なんてね。

私はコピー機じゃない。

こんなの、当たり前。

失礼します、って、他のひとたちが来る前に、とつと会議室を出よう。

戻ってゆっくりお茶でもしますか。

「あ、ちょい待って。」

この会社でかなり好感度が高い部長に、呼び止められるのは、嫌じゃない。

コピーの追加？それとも、ボールペンを持ってきましたか？

・・・なんてね。

そこまでのいい子ちゃんでもないし、早く用件言って欲しいんですけど？

部長は上着のポケットに探るように手を入れて、すぐ、私に向かっ

て何か、放り投げた。

「う、わっ？」

受け止めたのは、チョコレート。

赤いパッケージの、どこにでもある板チョコ。

「おやつに、どうぞ。」

キュッと上がった口角と、下がった眉に甘い瞳。

私は、軽く頭を下げて、会議室から飛び出した。
耳の奥、ガーガーとコピー機の音が残ってる。
用紙の熱が蘇って、手の平が、熱い。
カウントを打つ心臓が、壊れるかもしれない。

不覚。

入社3年目。

夏休みまであと3日。

人生3回目の恋に落ちた、23の夏。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8984g/>

くるくるサマー

2010年10月9日19時23分発行